

研究番号：20 委-2

研究課題名：摂食障害の疫学、病態と診断、治療法、転帰と予後に関する総合的研究

主任研究者：大阪市立大学大学院 医学研究科 神経精神医学 切池信夫

分担研究者：石川俊男，小牧 元，傳田健三，本郷道夫，中里道子，宮岡 等，坪井康次，

鈴木（堀田）眞理，赤林 朗，渡辺久子，武田 綾，上原 徹，野間俊一，

福居顯二，永田利彦，井上幸紀，岡本百合，瀧井正人，成尾鉄朗

1. 研究目的

我が国の摂食障害患者の動向、児童や思春期さらに働く女性における摂食障害の有病率、若年発症患者の早期発見の指標、摂食障害に発達障害や社会不安障害との併存、認知機能と脳との関係、児童患者の入院治療、神経性食思不振症（AN）患者の長・短期の入院治療の転帰と予後、神経性過食症患者（BN）の入院治療の有効性について明らかにする。さらに摂食障害患者の心理教育 CD ソフトの開発、社会復帰療法や治療のネットワークの構築の試みなどを検討する。

2. 3. 研究方法、結果および考察

1) 全国の大学病院およびその関連医療施設の精神科・心療内科および日本摂食障害学会の医師に摂食障害患者の実態調査を施行した。その結果、有効回答数は31%であった。そして最近5年間の患者数の変化についての印象では、ANとBNで「かわらない」が過半数を占め、ANについては「増加した」と「減少した」が同程度であった。一方BNでは「増加した」が「減少した」より上回った。これらの結果よりBN患者が増加していることが伺われた。

一方職場の摂食障害についての実態調査では、何らかの摂食行動異常を呈する労働者は約8%に認められ、女性の0.5%にAN、0.22%にBNが疑われた。さらに労働者の12.9%に夜食症候群を疑われた。摂食障害女性労働者では、自尊心が低い、上司・同僚の社会的支援が少なく、ストレスに対して情緒優先対処行動が多かった。これらの点を考慮して、職場の摂食障害対策に取り組む必要があると考えられた。

小児期のAN患者の早期発見の指標として、成長曲線上の体重減少と徐脈、思春期女生徒において、やせや体重減少に加えて徐脈・無月経が挙げら

れた。これらをANのスクリーニングに用い得ることが示唆された。

2) 摂食障害患者は、健常人に比して自閉性が高く、広汎性発達障害や注意欠陥多動性障害を併存する場合も少なくない。この場合、摂食障害そのものに焦点を当てるより療育に配慮した治療が必要であることが示唆された。摂食障害患者の約17%に全般性社交不安障害の併存を認め、治療において社交不安障害に焦点を当てた治療の必要性が示唆された。

3) AN患者に起立負荷試験を行い、心電図とトノメトリーセンサーによる連続血圧を測定し、自律神経機能について検討した。その結果、AN患者では、安静時だけではなく立位時にも交感神経機能不全を認め、起立負荷に対する自律神経機能調節が副交感神経系を中心に行われている可能性が示唆された。

4) 摂食障害患者の近赤外線分光法（NIRS）による検討で、摂食障害患者において前頭葉賦活課題遂行時に右前頭側頭葉や前頭前野眼窩面の機能低下を示した。

5) fMRIによる研究では、アレキシサイミア傾向の高いAN患者ほど身体イメージに関連した不快な単語の認知処理中において後帯状回の活動が低下し、痩せ願望が強いほど、痩せている他者との比較で左扁桃核、右前帯状回、両側楔前部/後帯状回の活動が上昇した。Wisconsin Card Sorting Test (WCST), Embedded Figures Test (EBFT) and Iowa Gambling Task (IGT) などにより認知柔軟性、セントラルコヒアレンス、決断能力の障害を認めた。

6) 重症ANの児童患者には、新生児集中治療に準じた24時間体制のANICU (anorexia nervosa intensive care unit) の有効性が示唆された。

思春期から青年期の標準体重 65%以下の低体重患者の入院治療において、行動制限下で入院初期からの経口摂取を行うことで、Refeeding syndrome をはじめとした重篤な身体合併症は予防できることが示唆された。入院期間の短期/長期の転帰に及ぼす影響について比較すると、短期入院でも良好な転帰を示す患者がいることが示唆されたが、今後の更に検討する必要がある。

7) 慢性の難治例について、治療ゴールを一律に設定して患者を急き立てることなく、治癒に強迫的にならず、患者個別の要因に注意して、粘り強く治療関係を維持していく必要性が示唆された。

慢性化した AN 患者の治療において、患者の QOL の向上には、在宅支援システムの構築などによる生活面での支援が必要であることが示唆された。さらに地域作業所でのリハビリテーションが、摂食障害患者の症状の悪化と再発の防止、社会復帰に対して良い影響を与えることが示唆された。

8) 摂食障害患者に対する啓発活動の一環として、AN 患者に対する心理教育 CD ソフトが開発され、2009 年 9 月より日本摂食障害学会 HP に掲載されて一定の成果が得られている。

9) 救命救急センターからの摂食障害患者の相談要請に（条件付きで）応えられると回答した全国 124 の治療施設のうち 112 施設から「相談できる施設」に掲載する事項の最終確認を行なった。そして摂食障害救急患者治療マニュアル第 2 版を作成し、その巻末に摂食障害患者の相談・治療要請受け入れ施設リスト（「相談できる施設」（全国 112 施設））を作成した。

これらの研究に関して、倫理委員会の承認が必要な研究課題については、倫理委員会での承認を得た。症例の提示を含めて患者のデータを使用する研究においては、人権擁護の立場から個人のプライバシーを最大限に配慮し、個人情報の漏出がないこと、さらに被験者の尊厳と人権の尊重など「臨床研究に関する倫理規定」に従った。疫学的調査においては、「疫学研究に関

する倫理指針」に従った。

4. 結論

摂食障害に関して児童や思春期さらに働く女性における摂食障害、若年発症患者の早期発見の指標、摂食障害に発達障害や社会不安障害との併存、認知機能と脳との関係、摂食障害患者の入院治療、摂食障害患者の心理教育 CD ソフトの開発、社会復帰法や治療ネットワークの構築など、多面的に検討され一定の成果を得た、そしてこれらの研究活動を通して、若い研究者の育成と専門医の養成にも一定の効果が得られた。

5. 研究発表

- 1) Nakazato M, et al : Serum glutamine, set-shifting ability and anorexia nervosa. Ann Gen Psychiatry. 2010 Jun 25;9:29.
- 2) Ando T, Komaki G et al: A ghrelin gene variant may predict crossover rate from restricting-type anorexia nervosa to other phenotypes of eating disorders : a retrospective survival analysis. Psychiatric Genetics. 2010 Aug 20(4) :153-159.

その他英論文 4 編、和論文 1 2 編

<雑誌編集・発行>

日本摂食障害学会・厚生労働省精神・神経疾患研究開発費摂食障害の疫学、病態と診断、治療法、転帰と予後に関する総合的研究班（主任研究者 池）編 摂食障害救急患者治療マニュアル第 2 版 2010 p22-25, マイライフ社, 2010

6. 知的所有権の出願・取得状況：なし。

7. 自己評価

- 1) 達成度について：50%位と評価する。
- 2) 学術的、国際的、社会的意義について：若手研究者を育てる上での社会的意義は高い。学術的には今後の検討課題が多く、個別적으로는それぞれ成果があったが、全体的には画期的な成果を得られなかった。
- 3) 行政的意義について：治療ネットワークの構築に関して、その土台を築けたことは意義深い。
- 4) その他特記すべき事項について：なし

